

● シリーズ 私の見た日本 Vol.233

日々是好日
— まちづくりからみる日本と中国

楊 潔雲 (ヨウ ケツウン)

中国重慶市生まれ。2018年重慶文理学院ランドスケープ専攻卒業後、都市環境に関わる業務に従事。2022年～2024年3月東京の日本語学校で学び、2024年4月から京都府立大学大学院生命環境科学研究科 環境科学専攻 視環境計画学研究室に在籍。日本において植物と住環境についての研究に取り組んでいる



私は大学の卒業論文のために、中国・重慶の「龍湖時代天街」を研究対象としました。その過程で、この商業空間のランドスケープデザインにランドスケープアーキテクトである戸田芳樹氏主宰の戸田芳樹風景計画が関わっていることを知りました。当時は、1人の大学生としてほかの来場者と同じようにこの場所に惹かれ、散策を楽しんでいましたが、まさか自分が日本へ留学することになるとは思ってもいませんでした。その後、家族の支援もあり、憧れの国である日本に留学することができました。緑あふれる都市重慶で生まれ育ったことが、ランドスケープ研究に関心を持った理由のひとつかもしれません。ランドスケープを学んできた私は、日本に来て新たな研究に取り組む今でも、日常の街並みに見られる緑に自然と目を向けて過ごしています。

重慶から東京、そして京都へと転々として、引っ越しによる新たな環境の変化に胸を躍らせるだけでなく、その土地ごとの緑のあり方にも期待と関心を抱くようになりました。実際にその場所で暮らしてみるからこそ、都市間・国家間における街並みの違いを肌で感じるができます。

本稿では、中国・重慶と日本の東京・京都におけるまちづくりについて簡単に述べます。

オープンスペースのまちづくり — 公園の分類

中国の公園は、大きく9つの種類に分類されます。総合型公園、記念公園、児童公園、動物園、植物園、古典公園、体育公園、居住区

公園、風致保全公園です。このように、公園のスタイルごとに分類され、公園の規模や設置場所、誘致距離などは各地方政府によって決定されます。

対して、日本の都市公園はより細かく分類されています。都市公園の種類は街区公園、近隣公園、地区公園や都市緑地・緑道など、合計12種類に分けられ、公園の規模や誘致距離も明確に定められています。都市公園の設置基準の明確化により、規範的な公園整備が可能となっています。そのため、東京から京都へ引っ越しても、公園の配置は同様で、どこに住んでいても必ず最寄りの街区公園を見つけることができます。

中国には、日本のような街区公園や近隣公園の制度はありませんが、それでも身近な場所で緑を楽しむことができます。これは、住宅団地や商業集合施設がある程度で街区公園や近隣公園、地区公園の役割を果たしているためです。

中国の住宅の大部分は団地形式で建設されています。2000年以降、団地の形態は大きく変化し、住宅の高層化が進みました。これに伴い、団地内の緑地も面積の拡大だけでなく、そのデザインや質も向上しました。このような変化によって、日本のような街区公園の設置はないものの、団地内の緑地が身近な場所の緑としての役割を果たしていると言えます。

次に、商業集合施設に目を向けてみましょう。2000年以降、重慶の商業集合施設は、単なる機能性の追求から、より体験価値を重視する

方向へと発展してきました。商業ビルと開放的な商業広場が一体となり、商業空間における緑化もますます多様化しています。歩行者が頻繁に行き交う広場はもちろん、商業施設の屋上庭園や室内庭園でも、豊かな緑を存分に楽しむことができます。このように大きく拡大・進化している商業集合施設の緑化は、日本の近隣公園や地区公園と同じような役割を果たしていると考えます。

都市の景観 — 建物の高さ

現在私が暮らしている京都市は、1200年を超える悠久の歴史のなかで、豊かな自然と数多くの歴史的資産や風情ある街並みが融合することで特色ある景観をつくってきました。京都市ではこのような景観を守り、生かしていくために非常に厳しい景観規制が制定されています。例えば高さ制限に関して、京都市を取り囲む三方の山々との調和を図る低層の市街地においては10m、京町家との調和を図る市街地においては都市空間として違和感のない高さである15m、商業・業務の中心地区である都心部の幹線道路沿道においては31mといった高さの最高限度が定められています。このような規制によって、市内の多くの場所から「大文字」を望むこともできるのです。山に囲まれた非常にフラットな都市の景観は、京都の大きな魅力のひとつだと思います。

私の故郷である重慶は中国の内陸都市の一つであり、その大部分（76％）は山岳地帯で、

丘陵地帯が22%、平地は2%に過ぎません。このような地形の上に都市がつくられているので、重慶は「山の都市」と呼ばれています。地形の起伏が大きいものの、重慶の高層ビルの数は少なくありません。重慶は、平坦な土地が少ないため高層ビルを建てるにはあまり適していませんが、その困難を乗り越えることで、重慶ならではの景色がつくられています。高層ビルと森が違和感なく共存している光景は、京都の景観とは対照的ですが、都市と自然の調和という点では共通しており、重慶の独特な魅力だと感じています。

小さな建物がつくる街並み

— 路地にみる日本らしさ

重慶で生まれ育った私は、高層の建物に囲まれて暮らしていたので、日本に来てから目にした「私にとって見たことがない風景」に新鮮な感動を覚えます。それは路地の風景です。東京でも京都でも、狭い路地の両側に低層の建物が立ち並び風景に出会います。そんな路地を歩きながら、両側の店を眺めたり立ち寄ったりすることで、日本独特の文化を味わうことができるのです。

日本では、東京と京都の2つの都市にしか住んだことがありませんが、東京はより賑やかで活気に満ちています。写真は亀戸の商店街で

す。街の景観としては電柱と電線の乱入が少し残念ですが、鮮やかな鯉のぼりが風に翻って、青空の下で一層美しく映えます。そんな生活感のある商店街や路地がとても好きです。

一方、京都はより静寂な雰囲気が出て、落ち着いた印象を受けます。京都には「町家」と呼ばれる伝統的な建築がたくさんあり、それによって商売と住居が一体化しています。写真は京都の祇園周辺で撮影したのですが、格子戸のある町家が立ち並び、提灯の明かりが柔らかく輪郭の風景がとても印象的です。最近では観光客も多く、静寂な雰囲気を感じられる機会は減っていますが、それでも京都の路地ならではの魅力があると感じています。

京都にも賑わいにあふれた場所もあります。四条、三条、祇園などの観光客が多く訪れるエリアには、ホテルや料理屋、ヴィンテージショップなどが立ち並び、その間には地元の人々の住居が点在しています。賑やかな場所でありながら、ふと心が静まる瞬間がある——このような風景こそ、「静寂と喧騒が共存する」空間なのだと感じます。

おわりに

こどもの頃、ベランダがなく窓台だけがある古い団地に家族と住んでいました。部屋は狭く、

植物を育てるスペースもありませんでした。母はそれでもオジギソウやオオミドリボウキの鉢植えを買い、窓台に並べていました。そのおかげで、小さな家ながらも、少しの緑が彩りを添えていました。

そして今、私は留学生として日本という異国で勉強しています。アパートの規定などがあり、部屋に自然の緑を飾ることは諦めましたが、今の部屋には特別な「緑の窓台」があります。カーテンを開けると、目の前には向かいのアパートに植えられた金木犀の生け垣が広がっています。3月末から4月初めの朝、窓を開けると、近くの幼稚園から聞こえてくるこどもの笑い声とともに、数枚の桜の花びらが風に乗って部屋へ舞い込んできました。9月末から10月初めには、秋の風に運ばれて、向かいのアパートの金木犀の香りがふんわりと部屋に漂い、私はその香りに包まれながら目を覚まします。

都市の風景は、国や地域によって異なります。しかし、その風景が人々にもたらす感動は、どこにいても変わらないものかもしれません。都市の風景との一期一会は、どこに行こうとも、私のこれからの人生を豊かにしてくれる思い出となるでしょう。



重慶两江新区光輪ショッピングセンター室内公園



東京新宿区戸山公園



重慶中心部



2008年以降に建てられた重慶市内の団地



東京江東区亀戸商店街



京都東山区宮川町